

福島県喜多方地区における衣生活の史的的研究(第13報)

呉服商S家の諸帳簿よりみた衣生活変容の過程について 聖和学園短大の石川妙子

—明治30年代を对象として—

県立米沢女短大 徳永綾久

郡山々大家政 関口富左 門馬壽子 佐原良

目的 住民の衣生活を販売者側の資料により考察を続けて来たが、今回は明治33年の帳簿類を主な資料として、衣生活の変容の過程及び変容の要因としてのS家の商法について考察する。

方法 S家2代目が当主であった明治33年の売立帳を分析し、前回までに考察を行なった明治40年代、大正初期と比較し、関係文献・睡取り等を参考に考察した。

結果 1.) 明治33年のS家店頭における品目別販売件数をみると、その70%近くが切・反物・綿・糸等の衣服材料である。2.) 仕事着・男子用下着は既製品も販売され、シャツズボン下等の洋風下着が汗取り等の和風下着と共に売られていた。シャツはS家の自家製品及びメリヤス製品である。3.) 洋服類の販売はまだ殆どなかつたが、トンビ等の外被類の販売は見られた。4.) 女子用については、下着類の販売はなく、ショール・東コート等の外被類は僅かではあるが売り始められていた。

考察 1.) 明治30年代の喜多方地方における衣生活は、男子用下着が和風から洋風に変つて来た。30年代に全国的に流行した東コートが、当地方でも着用され始めた等、その実態を知ることが出来た。2.) 衣生活洋風化の過程については、従来の和服の上に洋風の外被を着用する外側からの変容は男女共にみられ、地域の上層階級から始まつていた。また機能性がより重んじられる男子の衣服では、下着の洋風化等内側からの変容も早期に広く見られた等、その特質が考察された。3.) さらにS家2代目の積極的な商法が、地域の衣生活の変容とその促進に寄与した状況を知ることが出来た。